

[父との別れ]

1942（昭和17）年11月23日、私が満五歳になる2日前に、父は補充兵として静岡三四連隊に入隊しました（29歳）。

農業を営む家族は妻（26歳）と母親（53歳）、二人の子供（4歳、2歳）。その後、数回面会のため静岡を訪れた記憶があります。

ある夜、私が就寝中に「半狂乱」になり家族を困惑させたようです。父に会いたいのだろうから面会に行こうと「にぎり飯」を準備していたら、「元気で発つ」との電報が届いて、初めて知ったことでした。以来、再び会う機会は絶たれてしまいました。戦地に向かうことも軍事機密として家族にも知らせることの出来ない無情な時代でした。このとき以来「夢で知らせる…」という科学では証明できない機微な心霊現象を信じるようになりました。

生前、父の地元「青年団」「消防団」等の活動での慰労の写真の中には、幼い私の姿が常に映っております。短い親子の愛情が濃縮されたとでも言うのでしょうか。

[父の兵役としての足跡]

- 1942 11-23 補充兵として召集。静岡三四連隊に入隊
- 12-20 18:00 広島「宇品港」にて乗船（日欄丸6,000トン級）
- 31 22:00 廣東上陸 南支派遣 鳳第一〇四師団
- 1943 4-14 ビルマ派遣 烈第一〇七〇八部隊と隊名変更南支黄阜に集結
- 5-28 西貢（サイゴン）にての最後の写真あり
- 1944 1-1 仏印、タイを経てタイメン国境を越えてビルマ国へ
- 7 大本営、「インパール作戦」を認可
- 3-8 「インパール作戦」開始参加
- 15 第三一師団・五八聯隊・左突進隊としてチンドウイン河を渡る
- 25 第三三師団長・柳田元三、第一五軍司令官・牟田口廉也に
インパール作戦中止を提言
- 4-3 人跡未踏のアラカン山脈を越えてインド コヒマに入城
ディマプール～インパール道を遮断
- 6 第三一師団、インド東部の「コヒマ」を占領
- 18 戦闘救護班担架長として、同僚の負傷者収容のため潜進
負傷者を肩にして後送中、敵集中砲弾のため
「腹部盲守透性迫撃砲弾破片炸」により戦死（31歳）
- 5-31 第三一師団長、佐藤幸徳中将、独断でコヒマ放棄、撤退を命令
- 7-2 南方軍、「インパール作戦」の中止を下命

[慰霊の旅]

毎年のように「日本遺族会」による「戦没者遺児による慰霊友好親善訪問」

が行われています。2021（平成24）年3月「ミャンマー・インド方面…」の参加募集を知り応募しました。聞くとところによると当地「インド・インパール」は治安が悪く、今までには行くことが出来なかった場所でした。束の間の平和の貴重な機会だったのです。一行の遺児32名のうち殆どがミャンマーであり、インドへは4名でした。

巡礼コースには有名な「コヒマ市内激戦の三叉路」、小学校・病院の友好訪問や、コヒマ・インパール両地区では仮設の祭場を設け般若心経をBGMに供養を行いました。拝礼、黙祷、国歌斉唱、追悼の詞、ふるさと斉唱、焼香、献花、拝礼。慰霊祭には4名がそれぞれ準備した追悼の詞を読み上げました。その気持ちは10年を経た今でも全く変わっておりません。

「追悼の詞」

お父ちゃん、ようやく逢いに来ました。

この地を、この足で訪れ線香を手向けることが出来るとは今まで思ってもおりませんでした。最後の声を聞いてから70年の歳月が流れました。お父ちゃんの記憶は年々薄れつつありますが、残された写真で辛うじて繋ぎ止めています。そこに浮かぶ姿は若いお父ちゃんです。三つ年下の妹には記憶は全くありません。

15年前母が逝きました。30歳の父と80歳の母の55年ぶりの夫婦の対面でお互い分かりましたでしょうか？

若くして夫を失ったその後の母の辛苦は計り知れないものがありました。女手一つで残された妹と二人の子ども達を育て、僅かばかりの田畑を耕し、世間と付き合い、文字通り血を吐く思いの日々でした。そうした姿をお父ちゃんは遠くから見ていてくれたことでしょう。

あの日、静岡の連隊から外地に向かう日時を留守宅に知らせることも許されず、当日の朝、「元気で発つ」との電報が届いて初めて知ったことでした。以来、再び逢う機会は絶たれてしまいました。

その後、戦地から数多くの便りは届いても心根を吐露する事も許されず、「毎日お国のために元気でやっている」「しっかり勉強していい子になりなさい」「今年の米の収穫はどうか？」等々、当たり障りのない内容ばかりでした。

歳月が流れ、子を持って初めて親の気持ちが分かると言われます。5,000kmも遠く離れた異郷で息絶えるときの心境を推し量るとき、「残念だったでしょう」「悔しかったことでしょう」「妻や子に逢いたかったことでしょう」そして何を言い残したかったのでしょうか。

豪雨と飢餓と病疫を乗り越えて無事帰還された戦友の方々の綴られた記録により、後方からの食糧、弾薬の補給もなく、上級軍司令部の無謀な作戦のため犠牲者となった戦病死者は、余りに悲惨であったことを知りました。

お父ちゃん、残された家族は孫5人、ひ孫8人みんな元気です。

来年1月8日はお父ちゃんの生誕百年を迎えます。その日、墓前で思いを新たにしたいと思います。これからも私達を見守り続けて下さい。 俊

平成24年3月

[宇品港]

旅が好きです。いわゆる「鉄ちゃん」です。その一環として、国鉄～JR全線の乗り尽くしを2006年9月16日に達成しました。

その後路線改廃もあり、2017年の春の時刻改正で広島地区の「可部線」が、1.6km延伸（復活）されたのです。全線乗り尽くし100%確保のため、その区間の踏破に行ったついでに付近の観光を計画しました。

全国的に名の知れた観光地はすでに訪れていたつもりでしたが、何故か「錦帯橋」「原爆ドーム」「宮島」は盲点でしたのでいい機会でした。

広島地区の定期観光では「原爆ドーム」の後「宮島」へ向いました。通常宮島へは「JR宮島口」から宮島航路で渡りますが、コースは「広島港」でした。「広島港？」何か胸騒ぎがして記録を手繰り寄せながらガイドさんに尋ねました。「〃広島港、って昔は〃宇品港、と言いませんでしたか？」「昔の人は今でもそう言います」

宇品港 そこは亡父が外地に向け乗船した港でした。二度と再び日本の地を踏むことが出来るかどうか？不安だったことでしょう。軍港であった面影は今は無く、観光地でした。しかし、変わらぬあの山並みを振り返り、波の音を聞きながら、明日をも知れない戦地へ向かう父の心境はいかばかりであったか。73年前の遠い昔を偲びつつ、再び同じ山並みを、又同じ波の音を聞き感無量でした。

「そうか、父はここからこうして故郷に思いを寄せながら出航したのか～」その同じ場所の船上で、思いを新たに何度も振り返ったことでした。

そして、父は再び日本に帰ることも出来ず、1944（昭和19）年4月18日コヒマで戦死しました。31歳でした。

無言の墓石に手を合わせ

三島市遺族会 山田智司

昭和20年（1945）6月父が戦死した通知を受け取ったのが同年7月だった

と母から聞かされたのが、小学校へ入学する頃かと想像しています。勿論それ以前に話が有ったと思いますが、自分が理解出来ない事を考えての事と思います。

以来、自分には父親像というものは有りませんでした。姉を含め親子三人の生活は静かな日々で有ったと記憶、当時食糧事情は困難を極め、イモ中心と、すいとんの食事が続いていました。周りの子供達も同様、思う様に食料を口にする機会は、限られたもので有りました。

母親も小さい子供二人を抱え仕事に就き、苦労を重ね、日々の生活を支えてくれました。更に母親に苦労を強いた事は、小二時代、足骨折治療の診たて違いで、現代程リハビリも定着しておらず、回復まで仕事を休み、自分と街中を歩行訓練で歩いてくれた事でした。この事は今でも折に触れ思い出す、人生の忘れられない大事な出来事でした。

そして、自分が小学校卒業と同時に「山田家之墓」が建立されました。墓標裏面の母の名前、建立年月を見て、頭が下がり手を合わせています。

昭和 40 年代に入り三島市遺族会の皆様とお会いし、お話を聞く機会に恵まれました。同じ境遇の皆様でしたが、強くしっかりした生き様を感じたのも、この頃だったと思います。

学校卒業後、会社勤めが始まった時、社会人として恥じない行動をと、母親から口癖の様に教えられました。以来、高度成長期から企業戦士張りの勤めを続け、あらゆる事を経験、退職に至りました。

この間、母親も亡くなり四半世紀、数年前姉も逝去、子供達は独立し、我が家では長年世話を掛けた妻と仏壇を守っています。

県主催行事で千鳥ヶ淵戦没者墓苑・靖国神社参拝の折、遊就館見学者が意外と若い世代の入場者が多く、彼等が何を目的、何を感じ取っていたか、戦争（争い事）は誰一人幸せにならない事実を、多くの人々に理解して欲しいと考えるのは、自分だけでは無いはずで

令和 4 年 7 月 6 日 追悼の辞

三島市遺族会 堀池俊子

私は、昭和 20 年 5 月フィリピン・ルソン島で集中的に爆撃を受け基地に戻ってこなかった、と言う通知を受け戦死した堀池潤一の長男の嫁でございます。

戦友と言う方が、唯一形見の時計を届けて下さったときいております。

昭和 14 年に第一子が誕生する頃、静岡歩兵三四の六の一から手紙で、父親にひで子の方は如何ですか、何分お願い致します。異常の無い限り通知は手紙

で結構ですと 5 通の手紙の中で初めて義母の名前がありました。

一人息子を亡くした父親は翌年胃の病で亡くなり、それから義母は針仕事、姑は台所仕事で残された 3 人の孫の食事係。義母は、おかずの文句も言わないで食べてくれたよ、姑は口数の少ない人だったとか話してくださいました。

カナダから着いたタイサンボク、戦死した義父がうまれた記念に植え、ご近所にも同じ頃植えられた木が 2 本ありますが、一番大きく成長した我が家は、手入れが行き届かなかったのだと勝手に想像しておりました。

義母に、天国に召されたらお義父さんに会えるでしょうかと話しましたら、私が年を取ったから潤一は会ってもわからないでしょうと笑っていましたが、今頃は、3 年前に亡くなった長男、私の夫と世界の平和を祈念している事と思います。

何も苦労せず歩んできた私ですが、今の平和の為に貢献して下さった多くの御霊に感謝し、改めて日常の変わらない毎日が幸福だと実感しております。

本日、発表する機会を下さった田中様のお陰と、心より御礼申し上げます。